様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４８８

研究課題名（和文）アメリカにおける「自己啓発本」出版史に関する文化論的研究

研究課題名（英文）A Study on Self-Help Literature in America

研究代表者
尾崎　俊介（Ozaki, Shunsuke）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：３０２４２８８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカ及び日本で人気の高い自己啓発本の誕生経緯と発展経緯について調査・研究を行い、その成果は "American and Japanese Self-Help Literature" と題し Oxford Research Encyclopedia に掲載された。
　またこれに加え、19世紀半ばのアメリカで流行し、自己啓発思想を誘発する契機となった「精神療法」についての論考や、哲学者のラルフ・ウォルドー・エマソンを自己啓発思想の生みの親として捉え直した論考、さらに女性向け自己啓発本についての論考や、自己啓発本出版史におけるアンドリュー・カーネギーの役割を論じた論考など、計４本の論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
通常、サラリーマンの勤労意欲向上のための通俗本であり、文学的・学術的にはまったく価値がないと思われている「自己啓発本」に焦点を当て、その誕生経緯や発展過程を詳細に検討することによって、自己啓発本に価値がないどころか、むしろ自己啓発本の存在がアメリカと日本の近代化と経済発展を促進してきたことを明らかにした。さらにそうした国家的発展の陰に取り残され、自信を失くした個々人の心身のダメージを救済する役割すらも、自己啓発本が引き受けてきたことを明らかにするなど、従来、過小評価されてきたこの文学ジャンルを再評価する視座を定めた点に、本研究の学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：I did a research study on the history and development of Self-Help literature which has been very popular in America and Japan, and the report I made on this topic is now posted in the internet encyclopedia called Oxford Research Encyclopedias under the title of “American and Japanese Self-Help Literature.”
　In addition, I contributed 4 articles on this topic to some academic journals. The titles of the ariticles are as follows: “Christian Science and the Tradition of the “Mind-Cure Literature””, “Emerson: Copied Pasted and Retweeted”, “A Study of the Transitions in Development of American Self-Help Literature for Women”, “Three Legendary Figures in American Self-Help Literature, Andrew Carnegie, Dale Carnegie and Napoleon Hill”. All of those articles can be accessed on the Internet.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：自己啓発本　精神療法

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、本研究に取り組む前に「ハーレクイン・ロマンス」なる大衆的なロマンス叢書の研究を行い、それによって女性が読者層の大半を占めると言われる特異な文学ジャンルとしての「ロマンス小説」について、その誕生から今日に至るまでの発展経緯を踏まえつつ、なぜそれがかくも女性読者の心を捉えて離さないのか、その理由を明らかにしながら、一般には軽んじられることの多いこのジャンル小説の文学的価値を改めて確認する作業に取り組んできた。そしてその成果は、『ホールデンの肖像』（新宿書房、2014 年）という本の中にまとめ、世に問うた。

かくして「女性向け文学」としての「ロマンス小説」の研究が一段落した後、ごく自然に生じてきたのが、「世に『女性向け文学』なるものがあるのだとすれば、『男性向け文学』というものもあるのだろうか？」という問いであった。そして読者層の大半が男性によって占められるような文学ジャンルがあるかどうか思いめぐらせた結果、浮上してきたのが「自己啓発本」であった。立身出世や金儲けを指南する本である自己啓発本は、（少なくともその誕生時においては）そうしたものを目指す立場にある者、すなわち男性を読者層として想定していたのであって、その意味で「男性向け文学」であることは間違いない。その点で自己啓発本はロマンス小説の対極にあるものではあるが、それでいて立身出世や金儲けといった世俗的な価値観に基づく本として、文学的な観点から見れば価値がないと思われているところは、ロマンス小説のケースと通じるところがあった。

ならばロマンス小説同様、文学的には価値がないと思われている「男性向け文学」たる自己啓発本も、仔細に見直せば、これまで認識されてこなかった存在意義の発見につながるのではないか？

このような問題意識に基づき、本研究では、アメリカ及び日本において現在もなお隆盛を示している「自己啓発本」を取り上げ、その歴史的発展経緯と文化史的意義について、独自の調査・研究を進めることとした。

２．研究の目的

「アメリカ建国の父」とも呼ばれるベンジャミン・フランクリンの『自伝』に端を発する自己啓発本は、以来、「from rags to riches（＝無一物から大金持ちへ）」という言葉で言い表される「アメリカン・ドリーム」を支える精神的・実質的支柱として、二百年以上に亘って出版され続けてきた。そしてこの間、野心に燃える若いアメリカ人たちを鼓舞してきた自己啓発本は、その大半が日本語に翻訳されるなどして明治期以降の日本にも紹介され、日本の若き野心家たちをも同様に鼓舞してきた。そしてこの種の自己啓発本は、21 世紀の今日ですら日米両国において日々膨大な点数が出版され、読まれ続けている。文学が低迷し、その影響力の低下が取り沙汰される今日、社会への影響力という点では他の文学ジャンルを圧倒しているとも言えるこの自己啓発本は、ならば、いかなる社会的要請に応じて誕生し、以後、発展を続けているのだろうか？

本研究はこのような問題系を基礎に置き、自己啓発本なる文学ジャンルがアメリカにおいてどのような経緯で生まれたのか、またそれはどのような方向性と多様性を持った文学であり、どのように発展し、今日に至るまで隆盛を保っているのか、さらにそれはどのような道筋で日本に入り込み、日本における自己啓発本の誕生・発展・隆盛に寄与してきたのか、といった数々の疑問に答えることで、自己啓発本出版史の全貌を明らかにすると同時に、この文学ジャンルが社会に及ぼしてきた影響力を測ることによって、その存在意義を改めてアカデミックな観点から再評価することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は以下に示す３つの段階を踏んで進められた。

（1）まずアメリカ（及び日本）で出版された古今の著名な自己啓発本、及び自己啓発本についての代表的な研究書を可能な限り収集・読破し、そもそも自己啓発本なるものがどのような傾向を持つ文学ジャンルなのか、大凡の見当を付けて行く。

（2）上記の作業を行う中で、自己啓発本の時代毎の変遷を追い、かつ、より細かいサブ・ジャンルへの分類も行いながら、どの時代にどのような種類の自己啓発本の需要が高まったのか、またその理由は何か、といったことにも留意して、自己啓発本という文学ジャンルがどのような経緯を辿って発展してきたのかを明らかにし、いわば自己啓発本の文学史の構築を試みる。

（3）上（2）の作業を行いながら、自己啓発本に関わる興味深いトピック（例えば特異なサブ・ジャンルであるとか、特に言及すべき重要な作家等）があれば、それらを取り上げた個別の研究をモノグラフとして行う。

４．研究成果

本研究の結果、研究成果として発表された個々の論文や執筆物、あるいは学会における口頭発表について、以下にその内容を簡略に記す。

（1）インターネット上の百科事典『オックスフォード・リサーチ・エンサイクロペディア』に収録された論文、「American and Japanese Self-Help Literature」は、アメリカ及び日本にお

ける自己啓発本の出版史を概括したもので、本論ではまず 1818 年に出版されたベンジャミン・フランクリンの『自伝』に自己啓発本のルーツを求め、努力と節制により無一物から立身出世を目指すアメリカ的な向上志向としての「アメリカン・ドリーム・オブ・サクセス」はここからスタートしたと仮定する。その一方、19 世紀半ばにフィニアス・パークハースト・クインビーによって発見・実践された「精神療法」の原理、すなわち「病気は単なる気の迷いであり、『病気は治った』と強く信じれば、その病気は治る」という原理が、やがて「強く心に念じたことは、すべて実現する」という概念を生み、これがさらに「強く念じれば、どのような出世も、金儲けも可能である」とする「マインド・パワー系」の自己啓発思想に転じた経緯についても触れ、かくしてフランクリン型（＝自助努力型）の自己啓発本と、その対極となるマインド・パワー型（＝他力本願型）の自己啓発本が、19 世紀以降のアメリカに競い合いながら蔓延していったことを明らかにした。

また本論後半では、日本における自己啓発思想の展開について言及し、ベンジャミン・フランクリンの思想に影響を受けた福澤諭吉の『学問のすゝめ』と、同じく自助努力型の自己啓発本であるサミュエル・スマイルズの『西国立志編』（中村正直訳）が、江戸時代から明治時代への転換期にあった日本に最初の自己啓発思想を植えつけたことを指摘した。またその後、アメリカの著名な自己啓発書の大半が邦訳され、日本でも同様にベストセラーになった他、例えば松下幸之助の『道をひらく』や、水野敬也の『夢をかなえるゾウ』のような、日本人著者による多様な自己啓発本が数多く出版されベストセラーになっていったことを時代毎に跡づけながら、アメリカの自己啓発思想に多大な影響を受けながらも、独自の進化をした日本の自己啓発本の在り方について種々論じた。

(2)「アメリカにおける「精神療法文学」の系譜」という論文では、フィニアス・パークハースト・クインビーが 19 世紀半ばに発見した「患者自身が『治った』と強く信じれば、どのような病気も治る」という原理から説き起し、これがクインビーの弟子であったメアリー・ベーカー・エディの「クリスチャン・サイエンス」に引き継がれて、アメリカ中に「精神療法」が広まっていった経緯を明らかにした。一見すると荒唐無稽であり、かつ非科学的な概念であるかのように見える「精神療法」ではあるが、しかし、「極めて効果の高い新薬である」と言って患者に飲ませれば、実際には何の薬効もない偽薬であっても優れた治療効果を発揮してしまう「プラシーボ効果」という科学的現象は実際に存在する。本論ではこのことにも言及し、「プラシーボ効果」を楯にして、21 世紀の今日なお、「精神療法」の原理に沿った治療本が続々と出版され続けていることを指摘した。

(3)「コピペされ、拡散されるエマソン」という論文では、19 世紀末以来、アメリカで出版された数多くの自己啓発本の中に数えきれないほど引用されてきた思想家、ラルフ・ウォルドー・エマソンに注目し、何故エマソンの諸言説が自己啓発思想と親和性を持つのかを探った。エマソンの特異な神学思想の中には、人間を含む宇宙の万物が単一の起源を持つというような汎神論的な側面があり、それはアメリカの自己啓発思想、とりわけマインド・パワー系の自己啓発思想の根本概念と似ている。そのため、エマソンの諸言説を文脈抜きで抽出すると、世俗的な自己啓発本の言説と極めてよく似たものになってしまうことは避けられない。後世の自己啓発ライターたちが自分たちの主張を裏づけてくれる権威としてエマソンを利用したのは、こうした類似性によるのだが、本論ではそのような事情を指摘すると同時に、あまりにも頻繁に引用されるため、時として引用が不正確になり、またその不正確な引用が次世代の自己啓発ライターによってさらに引用されることで、やがてエマソンの言説とは相当異なった言説が、エマソンのものとして人口に膾炙していることも併せて指摘した。

(4)「アメリカ自己啓発出版史における３つの「カ―ネギー伝説」」という論文では、アンドリュー・カーネギーの『自伝』、デール・カーネギーの『人を動かす』、それにナポレオン・ヒルの『思考は現実化する』という、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて出版されたアメリカを代表する３冊の自己啓発本を紹介しつつ、実はこれら３冊の自己啓発本の間にある種の関係性が存在することを指摘した。

まずアンドリュー・カーネギーの『自伝』について言えば、これは自分の才覚と努力で無一物からアメリカを代表する起業家に成り上がった人物の自伝であり、その意味でベンジャミン・フランクリン型（＝自助努力型）の自己啓発本として読めるものなのだが、しかし、本作がベンジャミン・フランクリンの『自伝』と大きく異なるのは、本作が「金儲け」を是としたことで、これはストイックなカルヴァン主義の伝統を持つ宗教国家アメリカの伝統の中では画期的な意味合いを持っていた。

一方、アンドリュー・カーネギーの『自伝』から 20 年ほど後に出版されたデール・カーネギーの『人を動かす』は、起業家向けの『自伝』とは異なり、サラリーマン社会となっていた当時のアメリカにおいて、人間関係の改善によって立身出世を図ることを指南した本であって、その意味で同じ自己啓発本のベストセラーとはいえ、アンドリュー・カーネギーの『自伝』とは方向性がまったく異なるものであると言ってよい。ただ一つ注目すべきは、この本の著者のデール・カーネギーが、本書を執筆する少し前に自分の苗字の綴り（Carnagey）を変え、アンドリュー・カーネギーの綴りと同じもの（Carnegie）にしたことである。つまりデール・カー

ネギーは、あたかも自分がアンドリュー・カーネギーの親戚であるかのように振る舞うことで、自身の指南する立身出世法が、まるで伝説的起業家アンドリュー・カーネギーの成功の秘訣であるかのような印象を読者に与えようとしていたのである。

このように、先人の偉業を自分の本の後ろ盾にしようとすることは、自己啓発本の世界ではよくあることで、ナポレオン・ヒルの『思考は現実化する』ではさらに手が込んでいた。ヒルは本書の執筆動機について、アンドリュー・カーネギー本人から「成功哲学」を本の形にまとめるよう依頼されたためであるとし、アンドリュー・カーネギーとの面会の様子などを事細かに記しているのだが、実はこれはヒルの自作自演で、彼はアンドリュー・カーネギーと面会したことなど一度もなかった。それにも拘らず、本書はあの伝説の成功者アンドリュー・カーネギーの成功哲学そのものであると喧伝されて売り出されたため、6000 万部もの売り上げを記録し、今日に至るまで史上最も売れた自己啓発本となったのだった。

本論はデール・カーネギーとナポレオン・ヒルという、アメリカ 20 世紀を代表する自己啓発ライターが、それぞれ別な形でアンドリュー・カーネギーという成功者の偉業を利用していった事情について詳述しながら、自己啓発本の歴史の中で「アンドリュー・カーネギー」の名前が伝説化されていく過程を明らかにした。

（5）「アメリカにおける「女性向け自己啓発本」の変遷」という論文では、従来、男性読者のものであると考えられがちな自己啓発本の世界において、「女性向け自己啓発本」というサブ・ジャンルがあったことに着目した。

もともと自己啓発本には、社会の中で立身出世をしていくためのノウハウを伝授するという主目的があり、その意味で特に社会で働く男性読者のための本という側面があったのであって、とりわけベンジャミン・フランクリン型（＝自助努力型）の自己啓発本にその傾向が強いのだが、その反面、精神面のことに強い女性は、「マインド・パワー系」の自己啓発本の著者になるには向いており、実際、「精神療法系」自己啓発本には、初期の頃から女性著者が少なくなかった。

しかし、自己啓発本の著者として女性ライターの数が顕著に増えるのは、1960 年代以降であり、これは女性の社会進出と軌を一にしていた。つまり、女性が男性と同じように社会で働くようになった時から、女性もまた自己啓発本を読む精神状況に入ったということなのである。それどころか、男性社会で働く女性には、男性が社会で受けるのとはまた別な種類のプレッシャーがあって、そうした女性特有の状況を踏まえた「女性のための自己啓発本」の需要が高まったのである。また女性向け自己啓発本の変遷と発展を時代毎に見て行くと、各時代のアメリカ社会において女性がどのようなことに悩んでいたかということもまた明らかになるのであって、本論ではそうした視点から、「女性向け自己啓発本の在り方から見て取れる女性問題」についても言及した。

（6）論文執筆以外に、本研究の成果公開の機会として、以下のような学会発表を行った。
①2016 年 10 月 8 日に行った愛知教育大学英語英文学会第 23 回研究発表会における研究発表、「プラシーボとしての文学：アメリカ『自己啓発本』の世界」では、「心に強く快癒を念じることによってあらゆる病は癒える」という言説が、19 世紀半ばのアメリカでどのように発生してきたのか、またその「精神力で病気を治す」という趣旨の言説が、いかにして「心に強く念じさえすれば、どのような立身出世も金儲けも可能となる」という通説に変化し、19 世紀末のアメリカに流行したか、ということを概観しながら、精神療法文学と自己啓発文学が結びつく契機について考察を行った。

②2018 年 10 月 28 日に行った日本英文学会中部支部第 69 回大会での研究発表、「コピペされ拡散されるエマソン――自己啓発ライターとしてのラルフ・ウォルドー・エマソン」では、19 世紀アメリカを代表する思想家・哲学者であるラルフ・ウォルドー・エマソンの言説が、なぜか自己啓発本の中に繰り返し引用されることによって、アメリカの一般大衆の間に広く知られるようになったこと、及び、その引用がしばしば間違った形で行われるため、今ではエマソンの言説とは言えないものまで、エマソンの言葉として人口に膾炙している事実を指摘し、通常の文学研究の中ではあまり知られていないエマソンと自己啓発文学との奇妙な結びつきについて、明らかにした。

なお、上述した研究論文（2）と（3）は、それぞれ上記①及び②の口頭発表の内容に加筆訂正し、論文の形式で発表したものである。

（7）本項の最後に、３カ年にわたる本研究についての成果と、それに関わる反省点、さらに今後の展望について付記する。

本研究の最大の収穫は、『オックスフォード・リサーチ・エンサイクロペディア』に掲載された論文（「American and Japanese Self-Help Literature」）であり、これによって従来、看過されてきた感のある「自己啓発文学」に学術的なスポットを当てることができ、さらに日本の自己啓発出版史の概略を英語で世界に発信できたことは、大きな成果であったと言える。

また、この他に発表した４本の論文にしても、インターネット上に公開した後、相当数のアクセスがあることや、いくつかの出版社からこれらの論文をまとめて研究書として出版する提

案を受けるなど、自己啓発本の出版史という新しい学術領域を開拓したことの手ごたえは感じている。

一方、反省点としては、本研究を遂行する上で読むべき資料があまりにも多いため、研究のペースが遅くならざるを得ず、当初目標に掲げていた「研究書の出版」を３カ年の研究期間内に行うところまでいかなかったことが挙げられる。

しかし、この研究分野で今後自分が書くべき論文の本数や方向性については凡そ見当がついているので、今後の展望としては、このままこの研究を続け、できれば３年以内に研究書を完成させ、成果を世に問うところまでもっていくことを目標にしている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①尾崎俊介、「アメリカにおける「女性向け自己啓発本」の変遷」『愛知教育大学研究報告』第68号（人文・社会科学編）、2019年、1-14、査読有。

②尾崎俊介、「アメリカ自己啓発本出版史における 3 つの「カーネギー伝説」」、『外国語研究』（愛知教育大学外国語外国文学研究会）第52号、2019年、39-66、査読無。

③尾崎俊介、「コピペされ、拡散されるエマソン」『外国語研究』（愛知教育大学外国語外国文学研究会）第51号、2018年、43-59、査読無。

④尾崎俊介、「アメリカにおける「精神療法文学」の系譜」『外国語研究』（愛知教育大学外国語外国文学研究会）第50号、2017年、25-43、査読無。

⑤Shunsuke OZAKI, “American and Japanese Self-Help Literature”, in *Oxford Research Encyclopedias*, 2017 (DOI: 10.1093/acrefore/9780190201098.013.164)、査読有。

〔学会発表〕（計２件）

①尾崎俊介、「コピペされ拡散されるエマソン――自己啓発ライターとしてのラルフ・ウォルドー・エマソン」、日本英文学会中部支部第69回大会、2017年。

②尾崎俊介、「プラシーボとしての文学：アメリカ『自己啓発本』の世界」、愛知教育大学英語英文学会第23回研究発表会、2016年。

６．研究組織

(1) 研究代表者氏名：尾崎俊介

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。